

リーダーシップ研修 実施報告書

【演題】研究がくれた化合物の縁、人の縁

—膜タンパク質膜挿入の鍵を握る糖脂質 その構造と機能—

【講師】島本 啓子 氏（公益財団法人サントリー生命科学財団 生物有機科学研究所 主幹研究員）

【日時】平成 28 年 11 月 11 日（金） 16:00～17:30

【場所】岐阜薬科大学本部 大学院講義室

【参加者数】52 人（うち女性研究者 12 人）

講師の島本氏が所属するサントリー生命科学財団生物有機科学研究所には、女性研究者は 3 分の 1 ほど在籍しているそうである。島本氏は合成化学者であり、結婚・出産・



子育て・介護といったライフイベントを経験しながら、1つの職場で研究を続けてきた。このように長く研究者生活を続けられたことについて、まず話をさせていただいた。

特に子育て期でいちばん忙しかった時期は、「仕事 70%+子育て 70% > 100%」であるとの気持ちで仕事と家庭と両立していたそうである。つまり、もちろん 100%で頑張ってきたが、仕事も子育ても完璧ではなく 70%くらいで

できれば良いという、気持ちに余裕を持って取り組んでこられた。両者を足せば 140%で 100%より多くなる、個人的には丸もうけだ、と開き直りの気持ちで、100%頑張るようにしてきたというお話であった。今はこのように言えるが、当時はもちろん、悔しさがあったそうである。

そして、自分がこのように働き続けることができた理由を次のように挙げられた。①家族が健康であったこと、②家族の協力があつたこと（周囲の理解）、③職場環境、④社会資源の恵み（保育園、学童などを利用できたこと）、⑤社会制度（育児休暇制度、フレックスタイム制が利用できたこと）。周囲との関わり、協力が大きな助けになった。ここに、いちばんの原動力である「化学は楽しい」と思う気持ち加わり、現在まで研究を続けることができたと話された。

また、これから研究者として活躍していく参加者に向けて、いまは完璧を目指さなくても70%のできでもいい、残りの30%は利子であると考えて、将来自分に余裕ができたときに周りの方に返していくという心づもりでいま頑張っていくよう、励ましのメッセージがあった。そのためにも、細く長く続けてください、という言葉をいただいた。



このあと、糖化学研究の最新の成果に関して、詳しくまた大変わかりやすくご説明くださった。大学と企業とでは研究の進め方も異なり、企業側の話も聞いたことで、将来のキャリア形成を考える者には有意義な内容であった。

今回は学内だけではなく、学外からの研究者・学生の参加もあり、研究者としてのリーダーシップ育成および女性研究者として長く働き続けていく意識に関する啓発にもつながる有意義なものであった。